

赤川次郎

冬の旅人



# 冬の旅人

あかがわ じろう  
赤川次郎



角川文庫 6325

昭和六十一年三月二十五日 初版発行  
平成三年二月二十日 二十八版発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)三八一七―八四五―

営業部(〇三)三八一七―八五二―

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所 旭印刷 製本所 文宝堂

装幀者 杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

# 冬の旅人

赤川次郎



角川文庫 6325



## 目次

冬の旅人

五

巨人の家

二三

本末顛倒殺人事件

二九

三毛猫ホームズの水泳教室

三四

解説

山前

讓

二七



冬の旅人

## 1 へおやすみ

国際的なバリトン歌手として知られる、ディートリッヒ・FⅡDは、目覚めてからしばらく、ここがどの国の何という都市のベッドだろうか、と思ひ出そうとした。

旅行がちの——とはいへ、五十歳を目前にして、ここ数年、一年の半分はミュンヘンの自宅にいるようにしていた——彼としては、毎朝違うベッドで目覚めること、それ自体は別に珍らしいことでも何でもない。だが、そこがどこなのかを思ひ出せないことは、このへ今世紀を代表するバリトン歌手を可立たせた。

光をすっかり遮った重いカーテンと、ガラス窓を通して、絶え間ない雑踏のざわめきが聞こえて来る。

ああ、そうか。ここは東京だったのだ。

では、そう早起きをするにも及ばない。

ディートリッヒ・FⅡDは、毛布の下で、精一杯、体を伸ばした。

リサイタルの当日に、東京のひどい空気の中を歩くなどという真似はできない。それならばどうせ昼過ぎまでは、このホテルに足止めというわけなのだ。もう少し、ゆっくり眠っていてもいい……。



その時、ベッドの傍で電話が鳴り出した。何とも非音楽的な音だ。受話器を取り上げると、

「グッド・モーニング」

とえらく愛想のいい女の声である。モーニングコールのテープの声だ。

分ったよ。ディートリッヒ・F.Dは受話器を戻して、大きく一つ深呼吸をすると、ベッドから起き出した。

自分でコールを頼んでおいて忘れていたのだ。昨日日本へ着いたばかりで、時差の影響が抜け切れていないらしい。

窓辺へ寄ってカーテンを開けると、灰色の町が広がった。ここはホテルの二十階である。街中にあるこのホテルからは、オフィスの集中したビルの巨大な塊の行列を見下ろすことができる。

八時半という時間に、もう人々はせかせかとした足取りで、それぞれが自分の属するビルへと吸い込まれて行く。それが、入って行くのでなく、吸い込まれて行くという印象を与えるのは、あまりに動きがスムーズで、流れるようだからだろう。

ためらいもなく、黙々と仕事に赴く人々を見ている内に、ふと羨ましいという思いが湧く。自分は、アンコールの一曲を歌うにも、逃げ出したくなり、ためらいを覚えることが珍しくないのだ。

だが、そんなことを言っても仕方ない。

彼は大きな欠伸をして、バスルームへ向かった。——このロイヤルルームには、特にグランド・ピアノが置かれている。来日したピアノニストなども、よくここに泊るのだ。

シャワーを浴びる前に、彼はピアノの蓋を上げ、二、三のキーを軽く叩いてみた。いい音がする。会場では伴奏はむろんスタンウェイのピアノだが、これはヤマハだ。しかし悪くない。

実際、日本人の技術というのは大変なものだ。シャワーを浴びながら、彼は考えていた。

国によつては、シャワーをひねつても、一向に水が出なかつたり、急に熱湯が出て来て、それが当り前という所も珍しくない。しかし日本では、その点の安心感がある。故障というものを恥だと思っている。

日本も、もう七回——いや八回目だが、疲れを覚える度合が少ないのは、そういう安心感のためでもある。もつとも、その日本人が、空や水を汚し放題にして平気なのは、全く不思議な話だが……。

——シャワーを終えて、ガウンをはおり、バスルームを出ると、電話でルームサービスの朝食を頼む。

下で食べてもいいのだが、よく知人などに出くわすことがあり、それが煩わしいのである。受話器を置くと、すぐにまた電話が鳴った。——今夜の伴奏者、小林だった。

「よく眠れましたか？」

と正確な発音のドイツ語で訊いて来る。

「充分にね。どうもありがとう」

「今夜はよろしく」

「こちらこそ」

「Winterreiseですね」

「そうです」

「では向うで」

几帳面な男である。共演する日は必ずこうして電話して来る。向うにとっても、これが一つの儀式のようになってゐるのかもしれない。

今日は〈冬の旅〉を歌うのだった。

デイトトリツヒ・F♯Dは、かなりヴォリュームのある朝食を取って、部屋着に着替えると、〈冬の旅〉の楽譜を手にして、ソファに身を沈めた。

シューベルトの〈冬の旅〉は、およそ歌曲というものを聞く人ならば、知らぬ者のない歌曲集だ。二十四の曲から成り、その三分の二は短調の曲である。

この第五曲〈菩提樹〉——最初の長調の曲である——は、シューベルトの名も、〈冬の旅〉の名も知らぬ人でも聞き覚えがあるだろう。しかし、〈菩提樹〉は、この歌曲集の中ではむしろ例外的に暖かい歌で、全体は、狂気と絶望に塗り込められた、暗い響きを持っているのだ。

この全曲を歌うのは、彼ほどの歌手にとっても、やはり容易なことではない。——技巧的な難易で言えば、現代歌曲でも楽々とこなす彼には決して難しくはないのだが、総ての希望を失

って放浪する若者の思いが、内に籠もって表現されている所が、何度歌っても、完璧とは言ひ切れぬ理由なのだった。

しかし、これは日本では特に人気の高い曲だ。現に、この日の切符は、発売して二日で売り切れたということだった。

実際、この曲に対する聴衆の反応は、他のどの国より——ドイツよりも——日本の方が鋭敏である。灰色一色に塗りつぶされた世界が、墨絵を生んだ日本人の感性に合うのだろうか？ 彼は楽譜をめくった。——第一曲へおやすみへは次の一行で始まる。

「私はよそ者としてこの町に來た……」  
また電話が鳴った。

「やれやれ」

舌打ちして、ソファから立ち上がる。電話はつながないように頼んでおいた方がいいかもしれない。

受話器を取ると、ひどくたどたどしいドイツ語が伝わって來た。

「歌手のF Dさん？」

「私ですが……」

「お願いします」

と、その男の聲が言った。「今夜、〈冬の旅〉を歌うのはやめて下さい」  
「何ですって？」

「今夜のリサイタルで——」

「ええ、〈冬の旅〉を歌いますが、それが何か？」

「やめて下さい。曲を変えることはできません」

「分りませんね。なぜ〈冬の旅〉ではまずいのですか？」

「それは……申し上げられないが、ともかく、人の命に関わることなのです。お願いします。」

〈冬の旅〉を歌うのはやめて下さい」

「困りますね、そんな無茶をおっしゃられても」

「ご迷惑は承知しています。しかし、人の命には——」

「あなたはそういう方です？」

「申し上げます」

「いいですか」

ディートリッヒ・F＝Dは、穏やかに言った。「今日のリサイタルは満員になるはずですよ。」

多勢の人が、私の〈冬の旅〉を聞きたがっているんです。今さら、他の曲に変更することはできませんよ」

「そこを敢えてお願いするのです」

「それなら理由をおっしゃって下さい」

「それは……」

「人の命に関わる、とおっしゃいましたね」

「そうなのです」

「分りませんね。私の歌が、なぜ人の命に関わるんです？」

「あなたが今夜〈冬の旅〉を歌うと、人が死ぬことになるのです」

F=Dは、ちょっと間を置いて、

「私を脅おどしているんですか？」

と少し強い口調になる。

「とんでもない！」

相手は慌あわてたようだった。

「そんなことは思ってもいません」

「そうですか。あなたが、名乗りもせず、理由も言わないのでは、私としては答えを変える

ことはできませんね」

しばし、相手は沈黙ちんもくした。その間が長いので、彼は受話器を置こうかと思った。

「——よく分りました」

ひどく落胆らくたんした口調だった。「貴重なお時間をどうも……」

電話は切れた。

「妙な話だ」

と呟つぶやきながら受話器を戻す。——〈冬の旅〉を歌うと人が死ぬ？ 一体それはどういう意味

なのだろう？

いたずら電話とは思えなかった。あの、切羽詰まった口調は、真剣そのものだった。しかし……。

ディートリッヒ・FⅡDは肩をすくめた。気にしていても、どうなるものではない。

《冬の旅》は、歌わなくてはならないのだ……。

第二十四曲《辻音楽師》が終ると、凄まじい拍手の嵐が、ホールを揺るがすばかりに渦巻いた。

ディートリッヒ・FⅡDは、内心の満足を押し隠すように、無表情に頭を下げた。ピアノの小林の手を握る。そして舞台の袖へ入って行った。

「素晴らしい！」

音楽事務所の担当者が拍手で迎えた。

「ありがとう」

彼はハンカチを出して、額を拭った。

「今日は本当に凄かった」

と小林が言った。「伴奏していて、時々、ぞっとしたくらいですよ」

いつも冷静な小林の顔が紅潮している。してみると、今夜は掛け値なしに巧く行ったらしい。

「今夜は二曲ぐらいじやおさまりませんよ」

小林が言った。アンコールのことである。

「本当は〈冬の旅〉のような曲にアンコールは有害だがね」

と彼は微笑<sup>ほほえ</sup>んで言った。「しかし、私が聴衆でもアンコールを要求するだろうね。一曲でも多く聞けば、それだけ単価が安くなるからね」

小林は笑って、

「ともかく、舞台<sup>ぶたい</sup>へ出ましょう」

と促<sup>うなが</sup>した。

彼が姿を見せると、

「ブラボー！」

の聲が飛んだ。深々と頭を下げながら、彼は、〈冬の旅〉には、拍手もへブラボーも似合わない、と思った。

本当なら、教会で「レクイエム」(ミサ曲)を演奏する時のように、拍手なしと決めておいてもいいくらいだ。——しかし、聴衆の、決してお世辞でない称讃<sup>しょうさん</sup>はありがたい……。

ディートリッヒ・F・Dと小林は、もう一度袖へ引っ込んだ。今度出て行く時は、アンコールを歌わなくてはなるまい。

「二曲にしておきますか？」

と小林が訊いた。一応、歌曲集〈白鳥の歌〉から三曲を選んである。

「三曲やろう。久しぶりの日本だ」

と彼は言った。



「分りました」

と、小林が肯く。

アンコール、拍手。アンコール、拍手……。同じパターンが三度、くり返されて、やっと聴衆が帰り始めた。

「楽屋へ戻りますか？」

と小林が訊いた。

「楽譜を取って来るだけだ」

「じゃお待ちします」

彼は、階段を少し上って、楽屋へ向かった。——終った後の高揚感が、足取りまで軽くしている。

楽屋のドアを開けると、すぐに、それは目に入った。

椅子に、一人の男が腰かけている。いや、坐らされていると言う方が正確だろう。男はぐったりと身を沈めて、頭は胸元の方へと垂れていた。

死んでいる。——直感的に悟ったのは、男の胸元の、赤いしみのせいだった。背広、ネクタイはきちんとして、乱れてはいない。

近寄って、顔を覗き込んでみた。——見知らぬ顔である。

ディートリッヒ・F・Dは、あまり驚かなかった。——今朝の電話のせいだったかもしれない。忘れたつもりだったが、〈何か〉が起きるかもしれないという気持は残っていたとみえる。